

# 取り扱い説明書「山登文庫のささやかな利用の仕方」

## ☆はじめに

山登義明です。ようこそワンダーランド「山登文庫」へ。私は47年間テレビの世界に生きてきて、いろいろなことに好奇心を向けてきました。これまでおよそ1200ほどの数の番組を作ったと秘かに自負しますが、そのうち300は特集といわれる企画ものでした。レギュラー番組の定型のスタイルと違って特集は時代の気分と合わない企画は採用されませんが、そうでなければネタも演出も何でもアリ。好きなスタイルと演出を駆使して制作することが可の、とんでもなく自由な世界でした。どんな話題でもテレビは番組にしてしまうのです。昭和の時代に大発展したテレビというメディアは好奇心のかたまりと言って過言ではありません。(今から考えると、私の生きた戦後の昭和という空間は実に生き生きしていました)

私なども、ヒロシマナガサキの被爆問題から「冬のソナタ」のキャンペーンや赤塚不二夫とトキワ荘のような番組まで実に種々雑多なネタを取り上げて番組にしてきました。これらの企画を実際の番組として構築するために、たくさんの本や資料を集めて読み込んできました。こうして私の本棚は級数的に膨れ上がり、フシギの国、ワンダーランド状態になってしまうのです。これがそもそもの「山登文庫」の成り立ちです。

## ☆本のコンシェルジュとして一言

この文庫をかつて活用していた者として、ニューカマーである市民のみなさんとりわけ中高生の若いみなさんに、私がこの文庫のかしこい使い方、利用の仕方のコツをお教えしたいと今回しゃしゃり出て来ました。ちょうどホテルのフロントなどにいる多用な客のリクエストに応じてサービスをするコンシェルジュのように。ちょっと先輩面します。

\*

\*

\*

ここから「取説」の実践フェーズに入ります。

## 単行本を選べ！

まず最初に言いたいのは全集や著作集などは避けたほうがいいということ。よほどその対象の人間に惚れ込んだり関心があるならともかく、単に読書のネタが欲しいというなら、私は単行本を推薦します。

例えば、分類「その他」に入っているものであれば。

No. 8 3 「私の猫たち許してほしい」(佐野洋子)、

No. 1 1 0 「奇っ怪紳士録」(荒俣宏)、

No. 2 2 4 「私の折口信夫」(穂積生萩)、

No. 2 7 8 「軍靴の音よさらば」( 清水鶴子 )、  
No. 3 8 4 「エロティシズム」( 澁澤龍彦 )、  
No. 4 6 9 「もう一度、投げたかった」( 山登  
義明 / 大古滋久 )、  
No. 6 0 8 「故郷忘じがたく候」( 司馬遼太郎 )、

## ☆人生のしみじみを味わいたいと思っ たら。

分類「大江」に入っている、No. 8 からNo. 1 8 までの「小林  
勇文集」。小林は岩波書店の社長であり、エッセイストでもあ  
りました。小学校高等科しか出ていないのですが、メチャ文章  
がうまいのです。心にぐさっとささる名文です。生き方におい  
ても小林は名人です。

単行本であればNo. 3 2 「遠い足音・人はさびしき」を推薦し  
ます。小林は読み始めると止まらないからそのつもりで。

## ☆人生とはと考えるための論説なら、大 江文学を私は薦めます。

分類「大江」。No. 3 6 「ゆるやかな絆」  
No. 6 7 「恢復する家族」、  
No. 1 4 0 「生き方の定義」、  
No. 1 3 6 「定義集」。

いずれも大江健三郎の読みやすいエッセー。少し難しく考えることができるなら-

No. 1 1 0 「最後の小説」。

☆難解な大江文学は苦手というなら。次のフィクションの作品はそれほど怖くないし、かつ感動する作品です。

分類「大江」。No. 6 2 「雨の木を聴く女たち」、  
No. 9 6 「人生の親戚」、  
No. 1 2 8 「新しい人よ目覚めよ」、

☆ちょっと私にとっての大事な大江文学は。秘密も明かします。山登にとって大事な大江作品とは-。

分類大江。 No. 5 4 「個人的な体験」、  
No. 1 1 6 「ヒロシマノート」、  
No. 1 0 4 「懐かしい年への手紙」、  
No. 1 9 6 「あいまいな日本の私」

☆同じ文学でも向田邦子は読みやすい。向田は元来テレビの脚本家でした。だから文章が映像的でイメージしやすい。向田の場合、小説もエッセーも分けずにいっしょ

にして、その中からお気に入りを選択しました。

分類「向田邦子」 No. 1 ~ 3 「向田邦子全集」、  
No. 2 2 「男どき女どき」、  
No. 2 4 「眠る盃」。

## ☆郷土の敬愛する先輩中野重治 (中野が出た

旧制四高は、新制では私の母校だ)

分類「中野重治・佐多稲子」

No.1 ~ 1 9 中野重治全集のどこかに収録  
されている「歌のわかれ」が  
まず私のお気に入り作品。

No. 2 9 「夏の栞」(佐多稲子)。これ  
は中野の死をめぐっての逸話  
を他者である佐多が描いたも  
の。

☆井伏鱒二の前で酔って眠ってしまった苦い体験が私にはあ  
ります。思い出すと恥ずかしくてたまらない。目が覚めると、  
井伏さんは私の無礼を気にすることもなく泰然と盃を重ねてい  
ました。アナがあつたら入りたいと心底思いました。その後広  
島局に転勤しました。井伏さんの故郷は広島県の備後地方。没  
後10年、氏の生家に評論家の川本三郎とふたりで出向いて、  
疎開時代の井伏鱒二のドキュメンタリーを作りました。疎開し  
ていた井伏を慕ったのが地元の詩人木下夕爾という人物です。  
私はこのとき初めてその存在を知ります。彼は後に久保田万太

郎門下の逸材として名が轟きます。彼は詩より俳句のほうで才能が開花するのです。井伏には周辺に才能が集まっていた。太宰治もその一人です。

分類、「井伏鱒二」。No. 9 「黒い雨」、  
No. 1 9 「荻窪風土記」、  
No. 1 7 「太宰治」。

## ☆晩年の河合隼雄さんに可愛がっていた

だきました。河合さんは京都大学の先生で心理療法の泰斗でユング心理学の大家として知られています。京大を退官するとき、最後の講義を収録させていただいたことから縁が出来ました。

後年、小泉首相に乞われて文化庁長官に就任するわけですが、その直前に、半月ほどケルトの文化を思索する旅に出ただいたことがあります。私はイギリスウェールズ地方だけ付き合ったのですが、先生の穏やかな口調で語る「魔女の癒し」論を今も忘れられません。先生は難しいことをやさしい言葉で説くことができる、お話の名人でした。

分類、「河合隼雄」。 No. 2 「生と死の接点」、  
No. 1 4 「影の現象学」、  
No. 2 2 「ケルト巡り」。

## ☆詩というものは普段お目にかからない

が、人生の途次大きな力を与えてくれるもの  
のです。合唱コンクールの課題曲の詩を書いていた  
ことから、詩人吉野弘との接点が生まれました。長崎時代に、  
吉野さんを東京から呼んで西海の夕焼けを探訪してもらったこ  
とがあります。詩人吉野弘のことばに対する感受性の鋭さに、  
私はすっかりまいりました。吉野の詩もエッセーも難しくない  
言葉で書かれてあるから、全部読んでほしい。

分類、「吉野弘」 ひとつ挙げるなら、No. 1 1「叙景」。  
他の詩人も佳い作品があります。

分類「その他」。 No. 2 5 3「あけがたにくる人よ」は  
心にしみますよ。永瀬清子が80過ぎて書いたというのが信じ  
られない。

No. 3 1 1「望郷と海」。詩人石原吉  
郎は終生シベリア抑留の体験にこだわったのです。

No. 5 5 7「光る砂漠」。19歳死ん  
だ少年がとびきり美しいイメージを書き残していました。私は  
大学時代に出会ってからずっと作者の矢沢宰の短く純粋な人生  
に惹かれています。ちなみにNo. 5 9 4「若いいのちの旅」は矢  
沢のことを記した伝記です。古本屋でやっと見つけた本でした。

☆俳句はハマると止まらない。8年ほど前か  
ら「目白遊俳倶楽部」という結社に参加して、句をひねること

を覚えました。いやあ難しい、だが楽しい。ということで先人の名句を求めて句集や俳書をいつか集めるようになっていました。

分類「俳句関係」。 No. 7 「永田耕衣集」。神戸震災で避難していた永田を取材したことがあります。

No. 16 「実作俳句入門」。作者の藤田湘子という人はきっと意地が悪いと思いますが、句はすばらしい。

No. 25 「石田波郷」。波郷の住んでいた砂町の自宅で息子さんから彼の生涯を聞いたことがあります。彼が同人「鶴」で頑張っていた頃の日本はまだまだ貧しかったのですがね。その貧しさについっ惹かれてしまうのです。

分類「その他」。 No. 589 「与謝蕪村集」。今もとても惹かれるのが蕪村で、次に飯田龍太です。

☆オタクをバカにするな。文化に上も下もないぞという思いでサブカルチャーの番組を作りつづけました。私の誇りは、今やオタクの人であればみんな知っている大伴昌司を誰よりも早く発見したことです。以来、「少年サンデーVS少年マガジン」のライバル関係を軸にサブカルチャーの世界をずっと追ってきました。

分類は「サブカルチャー」。No. 12 「トキワ荘実録」。作者の丸山昭さんは2月8日に死去されました。私は2度丸山氏に



取材をかけました。

No. 3 1 「ウルトラ怪獣図鑑」。

大伴の名作です。

No. 4 4 「奇の思想」( 内田勝 )。

内田さんは全盛期のマガジンの編集長で、大伴の親友でもありました。晩年の内田さんは何かにつけて、私によく電話をかけてきてあれこれマガジンの思い出を語ってくれました。

No. 4 7 「OHの肖像」。この本は私の作った「少年誌ブームを作った男 / 大伴昌司」のあとに出来たということをお忘れしないでほしい。

☆**テレビの世界に身を投じた私**は、映像メディアの仕組みや文法のことをずっと考えて来ました。映像は特権的な人だけが作るものじゃない、誰でもできるということを証明したいと一冊の新書を書きました。

分類「映像メディア関係」。No. 2 「テレビ制作入門」。映像の大元の映画は初期どんなふう構築されていたかが気になって仕方がない時代が私にはあります。40代から50代にかけてのことです。そのとき偉大な伊丹万作という映画監督のことを知るので。

No. 3 6 ~ 3 8 「伊丹万作全集」。この人のことは大江さんから教えていただきました。大江さんの奥様は伊丹万作の娘だったのです。大江さんは松山東高校時代に万作の長男伊丹十三と友だちになります。奥様のゆ

かりさんは十三の妹でした。後年、「お葬式」や「マルサの女」など名作を次々に作る伊丹十三の背骨には「伊丹万作」という大きな道しるべがあったということを私は知りました。

といっても、テレビと映画は似て非なるものです。そのことを自覚させてくれたのはNHKの大先輩吉田直哉でした。

No. 6 7 「森羅映像」( 吉田直

哉 )。

テレビドキュメンタリーの実の母は映画のドキュメンタリーでなくラジオドキュメンタリーだと吉田は唱えました。そうして「仮説の検証」というテレビ独自の手法を確立していくのです。

☆**おわりに**。今回のコンシェルジュはこの辺りにしておきます。機会があったら、「山登文庫」の秘密をまた書くことにします。さよなら。